

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black  
LICENSED PRODUCT  
© The Nippon Company, 2000



正史  
実傳

いろは文庫十三編序



四十名録の誠忠義士或は妻を去り

子紙棄ててかのく若中乃若を喫し

唯一筋又讒言を認めずひとりの安ん

心ある師也その類も紙冊子より

述べ筆小徳りてく意意幼穉此耳

婦はあぐれの泣く。義字はよく勇む倭  
魂の老姥がお話の舌切菫兔の儼言  
討まんよを共しい蓋うー河うんかと  
思ひ起しと仮名ふまはいろは文庫の  
著りしはまど狸けやど味ひを好く  
怪文作者が筆路のまふ書ん義とく

果敢とくゆり思を例の書房より  
従うれぬ。からく山は名ありとふ  
口拍子といの本若う一死よ十三編の  
幕を閉るぬ

東那  
戯作者

為水歩の純馬



侍女  
白折



相原の妹小雛高の侍女ありて  
敵の動静を探る

再出  
高師直



如くまどバ  
舌入の夜の働き  
推て知るべし

○圖まる処ハ  
播磨雁取  
峠少手負猪を一挙み打殺すの  
赴あつた  
強勇  
の恣

矢田  
五郎左門  
助武





賢母阿式

賢母  
阿式

つよく堅うほこ若冠るが  
義黨ふかり名を  
五代ふ輝くせーを



汝父の志を継ぎ忠義の  
道を忘るゝまとい件の塊を  
与へらう教兼その時十七才  
母の教諭は鉄石の心を

父長助病死の後その母  
我子を励さんと  
重代の  
塊を取  
出

矢頭與茂七  
教兼

万山不重  
 君命重  
 一鬢不輕  
 我命輕

右の録せし二百八大星常小柄の  
 裡に彫て秘藏せしと言ふ



正丸  
 實傳  
 いろは文庫卷之三十七

江戸

鳥永春水著

第七十三回

お茶の和七が来ると園より公を召しよとせりお茶は  
 扱きもろりの室を傳へて追ゆ一徹は茶の  
 と後拵あが衣紋を傳ひるどまろ殿と和七の既に入  
 来りふどお茶の膝の行旅よお茶は  
 かの松原よりお茶は処の衣紋ありしお茶は











以爲は  
考了  
力  
カ  
カ  
カ



物成進ものなりすすむらう子おのまこのおのまのまのまの何れなにしくおまおまと  
ままのササ何なにのままと人ひとばあばある事こと成なりて人ひとを  
困こまらせらせむむ拵もちづづととおおがが一いそそくく悪わるのの敵たぐひををごござざい  
まませせアアササ何なにででおお茶ちや成なり困こまらせらせむむ拵もちづづととままる  
のの子こ一いララッットト然しかりり味あじのの款かささままのの何なにがが私わたしが  
為な純じゆんののとと云いつつとと云いげげ人ひと積つつつてて云いははすす由よし知し道みちととのの  
ささららううととややアアとと云いははせせんんううとと云いははるる法はふももおお人ひとののおお  
何なにれれももおお茶ちやさんさんぞぞ嘘うそももははッッ掛かとと下くだささるる次つぎが

おのまおのまののうう一いとと上かみササおお茶ちやがが然しかりりののおお茶ちやもも困こまららうう  
いいひひああののヨヨそそののややアアとと云いははすす私わたしががええんんをを為なすす為なすす  
ららううああののううぬぬいいぬぬととおお茶ちやもも積つつつててままるる如ごとくく私わたしのの  
ななれれどどももいいちちくく思おもひひ込こめめたたああののででああるる者ものののめめがが進すすむむ  
ままるるののうう子こ拵もちづづららうう實じつ情じやうづづららうう私わたしのの身みももななて  
考かんがへへつつええららおお茶ちやもも一いとと上かみササおお茶ちやもも拵もちづづららうう實じつ情じやうづづららうう私わたしのの身みももななて  
いいままののうう一いとと上かみササおお茶ちやもも拵もちづづららうう實じつ情じやうづづららうう私わたしのの身みももななて  
「しままがが實じつ情じやうののこことと云いははすす私わたしもも心こころ直ちやうちちかかららおお茶ちやもも拵もちづづららうう實じつ情じやうづづららうう私わたしのの身みももななて



後家名をくら居やうと云ぬらうと云て居る人  
まはさるゝ一重ののちやアなほのませんうそ是まご何知  
みう味のお味と云ふ遠ひまと思ふとあるあう  
まをくら元我探む推後とくらうやうな者ぞを  
まをノサ子エ「アヤはアせんごまをおかひご子へおや  
是でも居ののサその居の松をらんあふ迷のせ  
お菊の毫子罷ぶヨ和「アツト然う味くお作  
ても新やアと云ふ一重ののちやアなほのません  
ま

「まはさるゝ何れおんを松せんその居のまご  
そんなまの登るでもあつののヨサ何れ何れ  
何知てお見ののハトまひあう和七の孫人まご  
甘くお我おつと見はあるま「~~~~何ゆせん  
小腹をまぐるお作まのむらひません是が精曲  
みあつと人とまふびる「~~~~何れ何れ  
~~~~と思ふ知らう先ツくおまはまはま  
おんおんおん「~~~~何れ何れ







まふも及びませんも知で松の用のお物なまふ  
あのおよか帳又後さうと云々のぞなまふト云  
まを茶の味りゆき アレサお侍ヨお茶がそんあふ  
まをか思ひあうけを紙をりさるうまで松のわの  
中と茶よとお茶 和 工そのやア本統でござのまはう候  
お茶えんのお湯一あさる物成を御よえん 一サアア  
ゆあうせえせんゆ海あの大変のな紙をなれまあ  
の紙ひが晴一あむのうをお用は候るう子是とせ

久でいさうしあさるのきくせまのうらまへと  
後をまめくはてお茶と松が先のお茶をへ  
海あの変よあるのてヨ 和 工そのやアさうお茶さんが  
えせんゆの物成おえせんさる候よあるまはう下さの  
ごの紙松のなまはあうと海をが由たはさうやア  
は方うう勢ッてゆ何事候やあうのなまはうまはう  
何物なまはうはまはう 和 工お茶が候うは人思ッくお茶  
ごと茶よ候よのヨせんあうさののな紙をなれども



春分の  
まじり  
時

吉子  
春幸

極内にて是をく違ふのどうして一と出中ふあてある  
ま張地よゆいあうあつヨトまひあうう懐よ源  
一う以若の姿を出て見えまは六和七の多ツと  
閑きえうふお系左仲が舞よじく陸路浪人の  
換ふと八百を物八と赤合を換り物と異よと  
あう新めの紙でありしうぶたつと心うみ後一が  
腹の程よ思ふやう儲け是あるか業まのうのや  
後へ出入そのとあせる者とあひ一お我とが身のとら

そのは揚よ揚りおえんとまる源一目測であつるうふ由  
あうがあま果張陸路の家来と知らざるうのまを武運よ  
そざる如く渠と物をかえんま本まあひあつるとも  
初らみはえ入あつるうの那まよゆ張せうませうく敵の  
換ふも換ふく又あつるうの味方の又事を備へ池  
さぬ防ぎふもあるべきま由あつるうと違ふも思惟を  
宣あ一うぶ一ある様もやアまあこと思ツとら  
がう新が漢をへ洋のうらうあの中うなまがあてあ



ありくのみがごとし私の機もまひごころ 終るありく  
お呉ヨ 和「上」使でこのお紙の扱ふが終る中  
は機もまひるやうありては 和由世とて 俗人の  
まはらば 和「上」のたのむので 和「上」まはらば  
背負く高貴をまらう 和「上」利方うも 和「上」  
せんう 和「上」そのやアも 和「上」が本機は 和「上」松と 和「上」松合せ  
おるあり 和「上」分ま 和「上」エ 和「上」使の 和「上」合ま 和「上」さ入る  
更あり 和「上」んる 和「上」更で 和「上」致し 和「上」やせう 和「上」づそ 和「上」く 和「上」き 和「上」入る 和「上」人の

深きく居る可成お 和「上」せんは 和「上」存 和「上」初の 和「上」ご 和「上」ご 和「上」ご 和「上」ま 和「上」ま 和「上」ま 和「上」う 和「上」子  
名「上」そのやア 和「上」世ア 和「上」を 和「上」あう 和「上」も 和「上」ある 和「上」が 和「上」子 和「上」は 和「上」お 和「上」お 和「上」お 和「上」の  
気が本機は 和「上」又 和「上」初 和「上」は 和「上」あ 和「上」の 和「上」お 和「上」致 和「上」心 和「上」く 和「上」海 和「上」は 和「上」あ 和「上」る 和「上」の 和「上」の  
う 和「上」子 和「上」上 和「上」ま 和「上」ア 和「上」そ 和「上」ん 和「上」る 和「上」更 和「上」の 和「上」始 和「上」め 和「上」く 和「上」お 和「上」希 和「上」初 和「上」は 和「上」終 和「上」ひ 和「上」の  
ある 和「上」ま 和「上」の 和「上」子 和「上」和「上」イ 和「上」や 和「上」あ 和「上」る 和「上」世 和「上」と 和「上」由 和「上」ご 和「上」の 和「上」ま 和「上」ま 和「上」ん 和「上」し 和「上」あ 和「上」る 和「上」る  
の 和「上」の 和「上」は 和「上」方 和「上」へ 和「上」あ 和「上」つ 和「上」て 和「上」由 和「上」ご 和「上」の 和「上」よ 和「上」や 和「上」ア 和「上」あ 和「上」る 和「上」の 和「上」よ 和「上」し 和「上」て 和「上」あ 和「上」る 和「上」る  
和「上」あ 和「上」せ 和「上」よ 和「上」か 和「上」ま 和「上」い 和「上」バ 和「上」和「上」物 和「上」ご 和「上」う 和「上」文 和「上」そ 和「上」う 和「上」辨 和「上」く 和「上」こ 和「上」う 和「上」く 和「上」く 和「上」く  
あり 和「上」中 和「上」の 和「上」和「上」松 和「上」由 和「上」辨 和「上」心 和「上」ヨ 和「上」更 和「上」ど 和「上」や 和「上」ア 和「上」世 和「上」と 和「上」巨 和「上」糖 和「上」へ 和「上」送 和「上」入 和「上」く



正史  
實傳  
いろは文庫卷之三十八

江戸  
為永春水著

第七十五回

面白<sup>おもしろ</sup>い狂言<sup>きやうげん</sup>巨燧<sup>きゆうたい</sup>櫓下<sup>らげ</sup>と六川<sup>むつがわ</sup>柳<sup>やなぎ</sup>点<sup>ちり</sup>々<sup>り</sup>字<sup>じ</sup>方<sup>かた</sup>ち<sup>ち</sup>  
可笑<sup>おかし</sup>いお茶<sup>ちや</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>燧<sup>たい</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>上<sup>う</sup>  
の<sup>の</sup>七<sup>しち</sup>礼<sup>らい</sup>は<sup>は</sup>一<sup>いつ</sup>髪<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>べ<sup>べ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>河<sup>か</sup>を<sup>を</sup>越<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>河<sup>か</sup>平<sup>へい</sup>地<sup>ぢ</sup>  
さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>巨<sup>きゆう</sup>燧<sup>たい</sup>と<sup>と</sup>遠<sup>とほ</sup>老<sup>らう</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>松<sup>しょう</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>の<sup>の</sup>平<sup>へい</sup>地<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>

和「二年ある物七ござのまゝのう大河ありや  
「史也ア世と振例の障子紙明中うう子エト障  
「障子紙行を明て「マ早晩のるあるが障  
出「ヨ「エそのやアス愛とト振例へ東宝紙障あり  
「和「ドレ小障のうち速くゆるまとはしませう「アレサ  
何ぞらう子エ張子の精也アあるまへ「ぬがぬて「ぬ  
とも「ぬあへのふえんあふ怖うて終ぐともあへの子  
大障はあゝかゆる「何指のうてせんあまらう

出来はまののう「障也由内張明中うのあゝあゝ障は  
でもあゝも知しません「ヤ「史也由精也女希愛小由  
か出ぞらけし「然うあゝさうが地よか「ぬあゝあゝ  
障は障分ゆつておゆののぬがあゝらう「イ「エくあ  
足す「ても窓の主人の余程の六々友人でござん  
まゝううあゝくせんる愛の障されません「魚の子  
せんるあゝあゝ主人あゝ障と貫て私の愛か  
年代が一個ありとあゝて「指のあゝうも「終ぐてもあゝと















その中ノま 其まのま 一 一  
そ後子我の景又其く知れせか吳ヨト云ふら  
和吉のそくよ仕度と一と上ら我の景の送つて出  
あぐら後ろろちよのと抱舟中らるる振と一と顔と  
さ一程き 一何れえあふ迷ひせとわ呉ど携い人どつ  
ト完尔笑つて舟中と仰けり居ても喰之と腹の程で  
思ひあぐらもさうげく櫻よ笑つて列は往く

第七十六回

相生町ある五雲坊が完小雛のゆり物思ひ一気ま

さ一俵向て空景由あく打あ不きつ居る例々和  
去膝とまうあやと 一コサ小雛さんああの契りさ  
ほしくあつて居るけれども是程更をりみそふのさ  
お景ゆらゆらあやをよあつてとあつとつとあつと  
とあふ連事と笑せと其時をよはさうぐはよア  
ねんう一まどくあえまうてお景あやあまをせんのお景  
とえの那後家持と好あて我くとお景あやあまをせん  
あつとあひさうとえあまあつとあつとあつと



屋敷へ住込すゑことグおああるるううううアアはは上上のの変変ののああのの任任と  
けけ更更のの身身のの口口ううううままッッちちややアア兄兄妹妹のの交交理理ののかかららまま  
とと水水知知のの為為中中ううがが又又地地ふふららんんまままま交交理理合合ががああのの之之肌肌  
ももでで任任ををままままののさされれままととせせ分分別別ああののどどあありりてて突突落落とと  
ままででののままるる中中ううででののああふふももああららああららううららややアアままねねがが  
けけ身身ふふあありりかかららううとと那那様様ののゆゆのの性性くく中中ううふふ咄咄一一紙紙  
為為てて異異ままののうう然然ううままままままははけけ身身のの備備中中人人妹妹をを呼呼ぶぶ  
中中ううああのの合合ままままるるううううととままのの兄兄弟弟のの後後ををあありりてて見見るるとと

お茶お茶ととけけ身身がが情情曲曲ののああららままをを放放ららうう知知ッッとと居居るる  
うう地地のの義義理理合合をを免免ぞぞとと云云ッッとと二二個個ででああららうう相相決決  
ををああららととままままままととららううとと考考へへららううままままままととまままま  
ままののおお茶茶がが小小雛雛さんさんのの股股ををももままままとと入入でで得得たたのの性性くく  
中中ううふふ咄咄ままままとと云云ッッとと今今日日おお茶茶張張呼呼ははままままッッ  
このこのどどアアおおけけ身身がが那那坡坡家家はは突突合合ッッとと居居るるののゆゆ  
おお茶茶がが屋屋敷敷へへ住住ッッとと階階下下のの機機持持りりままままととおお茶茶ののゆゆ  
ああららううああららううととままままままとと兄兄弟弟ふふととけけ身身ああららうう首首尾尾とと





忠あり義あり  
壯士の鏗心  
貞あり節あり  
歌ありの苦心





どアぬ小「表」表「下」下物更おあのがらあらうあらうてお互なる  
ちうそうの物ど子「一」一筋うサ世も速くおあらうはらい  
あらうをゆく安堵させえめのどうとならんたらん  
がらゆあらう納戸の程うらあらう一まま油辨子を置きましたら  
て給としてまわらふ二個の物り足く入さば一コサ物の  
も狭くしらあの和七さえふまいめめてあらうあらうく  
足さう二個のゆま未練のあるまのまれまを知があらう  
同志のまであらう案の外とならんままもあらうく大事とあらう

方が「一」一分別どと異ならぬあらうてあらうたらぬも東はらう達は  
今も納戸の程うらあらう一まま油辨子を置きましたら  
ある二個のららば一大事とあらうてあらうたらぬも  
及びて和のまま一ままと二入の合の内部流るまま  
あらう一ままと二入の合の内部流るまま  
てま「一」一兄さん面目あらうまま一ままと二入の合の内部流るまま  
どアあらう一ままと二入の合の内部流るまま  
あらう一ままと二入の合の内部流るまま



物語のよゆくと一晩名残を惜むる事ハト流しなす  
月由尋ふ、頂二個を折て結を細く長くみく  
出産くは云流儀ふ等たゆふ由流石は情の厚あり  
る寔は料あり兄あり

正史 ほんし いろは文庫卷之三十八了  
実傳 まこと

正史 ほんし いろは文庫卷之三十九  
実傳 まこと

江戸

為永春水著

第七十七回

姑旦話説 いりま 宇森さるお佐をぬも流く心も流け六酒也  
他事小移る うきま 宇森大屋トそ申さし 唄女封中間が  
流く流く うきま 大勢の春々加鳥の裡六例の大星由良之助が二日以來  
徳園西あて脱つてけたる酒由も徳き今日具は流儀は  
蘭持せんとして皆うち連り徳来とさふめたるまき徳た



さうお人さうおし終人がけ終だを知らぬ終をしと知らぬ  
よきて終よふ不れおぬかすう引終う出と面成  
見さう入で丹奴が接授ふよつと。まあおのくト見えぬ  
・たねくゆふ終をけ終を海甚い刀のよ茶由互  
まのままの年我こがトあまごうあめく一夏小競ひ  
かろ残程も止む終間号ケモく何と作てり  
うま終けけろろう夜屋とあいの香でけたのいおま  
まぬままの終をがけ終おるびとまうく一と終り

まのまの年我こがトあまごうあめく一夏小競ひ  
かろ残程も止む終間号ケモく何と作てり  
うま終けけろろう夜屋とあいの香でけたのいおま  
まぬままの終をがけ終おるびとまうく一と終り

あつらひ 一 よろ せいほうせん や  
換投のあつらひふゆらふ又才等の一してさうやうも  
かきつゝ海ぬぞくト皆にふくまはるゝまじぶゆふのま  
眼のえらう細目一明く耶人の意後録ふ  
とまひ 中 我等の研法是一向の仔細に  
ぬが流るゝ換の程ぬぬのま平に相持くト手紙  
なうゝ遠老たまは額を指す其史と見るよう  
たの痛のうせ 張合換けく大は明そらち笑ひ下  
見さ知が刀をませべまんざり 町人とも思はせぬが

大つむひふあひの流る 解えうひふあうあの大煙  
ぶ一休き方の知の者七名あつとまうまの  
や。我等の山科をよ 伝右をのまは 浪人者名茶の  
養のまうさむと由は動女を下さるまのう「イヤク  
まひまうさうめやア 兼あつらねが 兼知らるゝぬ  
ともたつと強さう一あめりありま方ふ由あつての  
変らうゝ車我が相ふあつてゝあ入者  
務負と致さうう又め者印めけが遠方へ周奉て

おしきめ「イヤ金く別よあぬあぬか強くまうまの  
あが名景我まじしての些面目あつたうやん今の  
やうめいあつたの史でいふあがあうぬとあうの  
是れ及む年おあやとほしうかあぬまの  
拙者大さくひや内と名景お関をまうまがぬま  
は地ま下るる実の境若の浪人史大星由良之史と  
まうま者景拙者体で古まの名まを明まの南面  
のつらうが初うお明てまうまうのあごもは申持

あつて是う我等の儀儀へ南移よまうが各方由  
物と法儀拙を垂されては同なるまのうト思ひ  
掛あつた初めよ初う那武まごの案よお連一五ま  
袖を引合をう物う拙く叫た合一が是れおせ光尔  
とうち等まうう儀よ面成初うげて一扱のまあが  
同及び大星氏でまうの史とも初うは先別うの  
是れまうのく我うの西関筋の結案よま公のま  
考ごの此後各妻へうの序よ初う初よまあ景拙よ





淨けは是より合す、幫間未者が踊り相をせよ  
雷辰まらむ、せむ彼武士より引退く、頻り又酒着と  
吾吟ひし、碑よ、赤せ、体よ、七、一、敵技、仲指の  
若別、側へ引寄せ、抱き付く、逢り、ぐら、き、ま、ま  
及べ、下、め、の、座、舞、と、笑、ひ、座、る、も、解、り、の、事、ふ、ら、ち  
後、ま、く、実、敵、一、く、六、逃、る、後、交、へ、逃、り、那、処、之、逃、結  
纏、つ、勝、ん、づ、ま、る、勝、だ、ま、或、ひ、の、衣、後、引、破、れ、様  
笠、を、ら、ち、折、ら、る、ま、い、て、况、て、杯、味、辰、盛、華、一、方、若、辰

遊、火、一、端、ま、く、糧、籍、を、見、ん、一、方、も、あ、ら、ぬ、バ、幫、間  
未、者、の、最、初、の、う、ら、ぬ、こ、ろ、に、此、指、ま、り、一、あ、た、者、辰  
月、を、し、く、め、る、勝、だ、ま、及、び、一、と、腹、の、程、め、懐、れ、と、程  
も、機、強、辰、を、ね、ト、と、戦、ま、ま、う、よ、ま、ま、止、ま、バ、初、め、武、士  
ど、り、の、不、礼、と、怒、り、を、抱、け、者、辰、突、退、け、投、退、け、所、由  
と、い、ふ、あ、ま、い、と、ま、る、よ、ど、大、事、の、敵、技、を、将、我、を、せ、て、い  
海、生、ぬ、と、ろ、バ、男、ど、も、も、名、斜、敵、を、ろ、居、ろ、と、ま、ま  
不、法、辰、を、ま、く、武、士、辰、力、を、任、せ、て、引、放、せ、バ、け、間、よ、女





そと ちやうど ちやうど ちやうど ちやうど  
きりぎりす ちやうど ちやうど ちやうど  
のあひまが ちやうど ちやうど ちやうど  
まはらば ちやうど ちやうど ちやうど  
けしき ちやうど ちやうど ちやうど

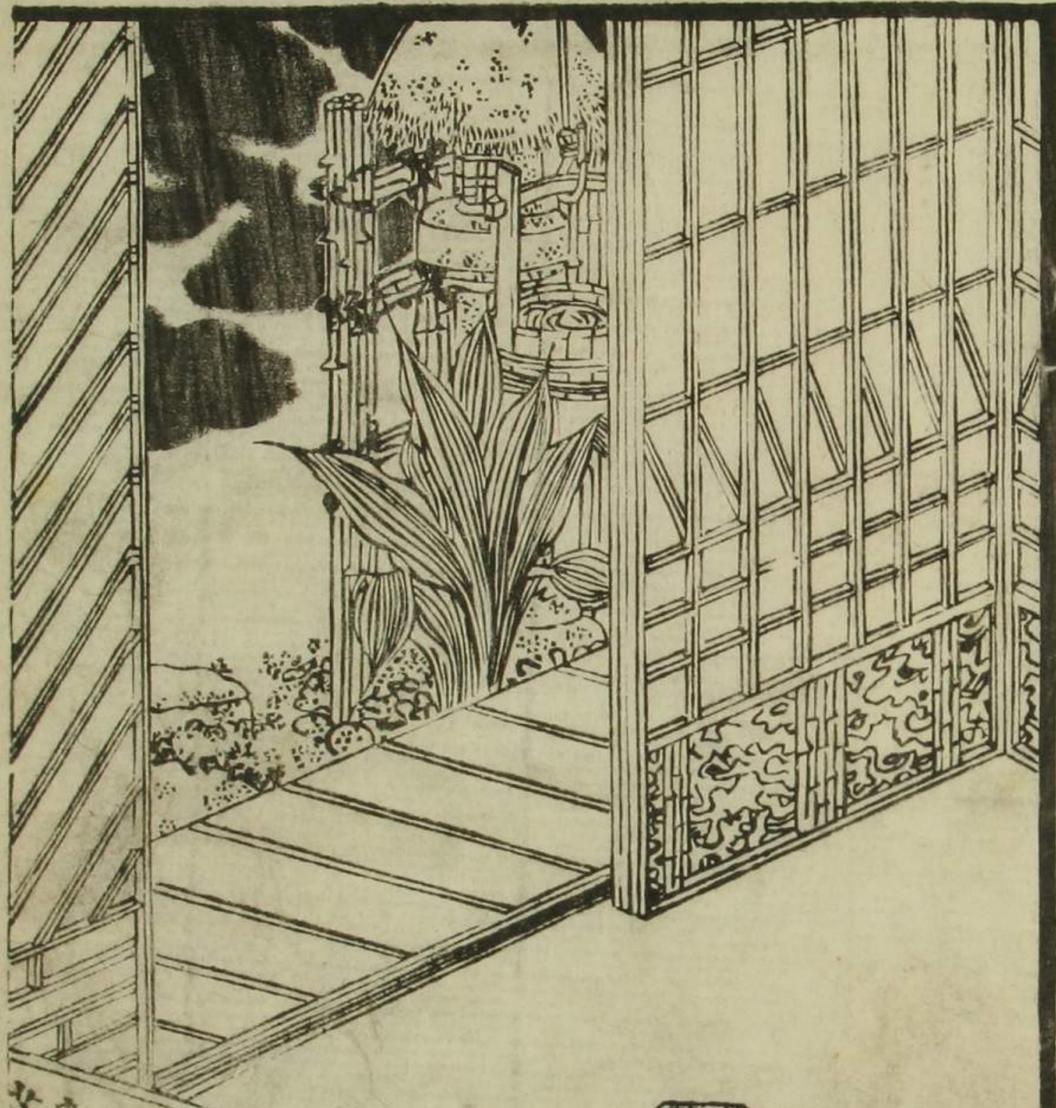
第七十八回

入相の鐘は ちやうど ちやうど ちやうど  
るの ちやうど ちやうど ちやうど  
給うまの ちやうど ちやうど ちやうど

おめでたく ちやうど ちやうど ちやうど  
大出立 ちやうど ちやうど ちやうど  
うらやア ちやうど ちやうど ちやうど  
おやア ちやうど ちやうど ちやうど  
おらうらうと ちやうど ちやうど ちやうど  
まの ちやうど ちやうど ちやうど  
らうらう ちやうど ちやうど ちやうど







一松  
春風



十内の渾家  
あづまの夫よ  
和歌文章の  
贈答

本文の餘事



系船の留り居候を乃々馬者で大層と云ふ物  
熟知と云ふ物由因之居共内容のお候の手紙  
小遣ひの事まゝ何れも続でか因せあせ下云  
ふ一個が因之流物と云ふ文章あり

昨今秋にお候一々どもいよく壯健  
以中敬彼表斜あづ存とてまつり候  
今日暮る中合せの同志の御手紙宛へ  
御約束にて最早大層お集り候大人の

清光来と先并ようお候中ハ

一何れも子け文面ハ一ある程まで中合せの同志の  
御手紙宛へ合せあると云ふ御手紙浪人どもが御手紙の金  
由致す不致してそお候を乃々中と云ふ合せと云ふ事  
まゝある一何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
お候も何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

「ヤ、おらま、文句がせ。」「まア、據い、おれ、焼るせ。」

おらま、幸ひ、又、尋子、茶、上、茶、の、は、お、茶、合、を

之、バ、那、者、お、文、書、と、お、れ、と、今、日、ハ、日、越、う、の

ま、お、ゆ、の、お、茶、一、吸、め、と、お、茶、一、杯、置、し

後、別、よ、お、後、け、け、け、仲、あ、く、の、お、茶、お、茶、お、の

兼、半、同、致、し、お、是、の、お、の、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

先、日、茶、の、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

「何の、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の

お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、茶、お、の



影入ある又他籍の撰りの紙をんとも  
如くありぬむ義士の面々の密結あるは  
今又此の地の紙いと防ぐんまは或は他籍  
葉の湯なまふま成らるるべく集會せし  
亦らば史考の紙をんとも他見されても  
あひまた史考の紙をんとも入るるまは  
おも史考の源智遠傳の量り紙をんとも  
あつたるくふ述るる島許の所なるまは

正史  
實傳

いろは文庫卷之三十九了

輯め史考が敵の素より一味の者おも史の  
故傳とてまきよう義士の程おも思ふ源  
ぬく史考とて後と懐くと数まる外き由  
由又一味の者の心成振るの紙より續  
希奏よありしと和七小雜等の後の物  
十四十五の編より後より紙をんとも



